

佳作(語り部の里賞)

生き続ける

城田 由希子

奈良県



「亡くなった人の思い出話をするのが一番の供養になるらしいです」父の命日に届いた義母の手紙はこう続いた。「あなた方のおじいちゃん、おばあちゃんは、こんなに素敵な人だったと折に触れ、孫達に思い出話を聞かせてやってくださいね」

私の実母は7年前に、実父は3年前に亡くなった。私の息子達の中では、祖父母の記憶はどんどん薄れ消えかけていた。特に次男は、ほとんど何も覚えていないと言う。

義母に手紙をもらってから、思い出話を少しずつ始めた。息子達によると、聞いているうちに忘れていた昔がうっすらとよみがえってくるらしい。一緒に魚釣りに行った、わらびを採りに行った、おいしい鰻丼を食べた。家族で思い出していくうちにそんな楽しかった場面が見えてくると言った。まるで映画のワンシーンのように色をつけ、祖父母の顔が思い浮かんでくるらしい。その中の祖父母はいつも元気で笑っているとうれしそうに次男は教えてくれた。「実は」と前置きし次男は言った。「今までは、お通夜で見たおじいちゃん、おばあちゃんの顔しか覚えていなかったんだ」

先日、ある本の中で「人は亡くなっても誰かが心の中で思い出している限り、その人は生き続ける」と書かれていた。その言葉に希望が見えた。私の父母は、私の心の中だけでなく確かに孫の心の中にも生き続けている。

風にふかれて思い、花の香りを感じて思う。おいしい味覚に触れて、その度に思い出すのだ。父母が私を慈しみ育ててくれたあの日々を。

私の心の中で父母と共にこの時間を生きている幸せをかみしめながら、今夜は久しぶりに息子達と一緒に思い出話をしよう。心の中の祖父母の笑顔がもっと増えるように。